

研究課題	生活や社会の中の音や音楽と主体的に関わる音楽科の題材開発
副題	～探究的に音楽を創り出す学習過程・思考過程に着目して～
キーワード	中学校音楽科／創作／探究的な学び／協働的な学び／生活や社会の中の音や音楽
学校/団体名	国立大学法人広島大学附属三原中学校
所在地	〒723-0004 広島県三原市館町二丁目6番1号
ホームページ	https://www.hiroshima-u.ac.jp/fu_mihara

1. 研究の背景

中学校学習指導要領には、音楽科の目標として「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化に豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すこと」と記載されている。私たちの生活の中で音楽は至る所で存在し、音楽のもつ意味や価値は人によって大きく異なる。音楽科の学習において、音楽のもつ価値や音楽の文化的側面を考えたり音楽を創る体験をしたりすることは豊かに音楽に関わるだけではなく、今後の人生の中で多様な視点を獲得したり様々な価値観を認めたりする生徒の育成につながると考えている。また、高等学校で総合的な探究の時間¹⁾が設定され、中学校の総合的な学習の時間においても探究的な学習の過程の充実が求められている²⁾。さらに、総合的な学習の時間ではよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を、次の3つの目標のもと育成することとしている。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関する概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

これらの資質・能力や目標の内容について、総合的な学習の時間だけではなく音楽科でも教科の目標を達成しながら豊かに学ぶ上で効果的に働くものであることから、本研究では探究的という言葉を副題におき、探究的に音楽を創り出す学習過程・思考過程に着目することとした。

2. 研究の目的

現行の中学校音楽科学習指導要領の課題点として、文部科学省は「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められる」ところである」と教育課程部会芸術ワーキンググループが述べている（波線部

- 1) 平成28年12月の中央教育審議会答申において、学習指導要領等改訂の基本的な方向性が示される中で従前の総合的な学習の時間の成果と課題をもとに、平成30年告示の学習指導要領より総合的な探究の時間と名称を変更した。
- 2) 中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編では、総合的な学習の時間の目標の冒頭に探究的な見方・考え方を働かせるということを置いた理由として、「探究的な学習の重要性に鑑み、探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え、中心に据えることを意味している。」と述べている。

は筆者によるもの)。本研究では、この現行の学習指導要領の課題点から、波線部の「他者と協働しながら音楽表現を生み出す」ことや、「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深め」ることを主眼におき、生活上の課題の改善と音楽科の学習との関連について題材を開発し、授業を実践し、生徒の姿からその効果を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の経過

本研究の概要について表1に示す。

表1 研究の概要

①時期	②取り組み内容	③評価のための記録
7月9日	オンラインサポートでの指導	レポート作成
～8月	授業の構成・指導計画の作成	
8月9日	CMづくりにおける音楽の役割について、専門家にインタビューの実施	
10月9日	オンラインサポートでの指導	レポート作成
11月中	授業の実施	・アンケート調査（生徒） ・観察記録・写真（生徒） ・生徒作品
11月18日	オンラインサポートでの指導	レポート作成
11月30日	令和6年度 第27回 幼小中一貫教育研究会	・アンケート調査（生徒） ・観察記録・写真（生徒） ・生徒作品 ・アンケート調査（参会者）
12月27日	オンラインサポートでの指導	レポート作成
2月12日	オンラインサポートでの指導	レポート作成
～3月	データ分析と研究のまとめ	報告書等の作成

4. 代表的な実践

本研究では、探究的に音楽を創り出すことを中心に扱っている。代表的な実践として中学校3年生の授業「生活における音楽の役割やその価値とは ～学校紹介のCM音楽づくりを通して～」の様子を報告する。なお、授業の詳細については、学習指導案(図1) (<https://x.gd/pXhIe>)を参考にされたい。

【1時間目】

授業の導入として、コーヒーのCMを例に挙げながらCMにおける音楽の効果について考えた(図2)。また、CMには、宣伝したい商品などがあること、そして企業のコンセプトがあることを生徒に伝え、音楽がCM鑑賞者に与える印象についても考えた。さらに、授業者が作成した音楽A・Bを比較しながら鑑賞していく中で、同じ循環コード³⁾を使用して作曲したのもでも音色やリズムなどの音楽を形づくっている要素が変化することで与える印象が異なることを学び、今後4時間の音楽科の授業で学校を紹介するCM音楽



図1 学習指導案
(教育研究会で配付したもの)

3) そのコードを循環させることで曲を成立させることのできるコード進行のこと。本授業では、C→Am→Fmaj7→Gの進行を使用した。

づくりを行うと課題を設定した。

音声をカットして 複製した印象	おいしい。大人のあじ 青春はじき。 つかはじき。 白黒	おいしい。バ・ジュモ・コービー 牛乳。ほい。 あまい印象	爽やか、す、さり 青、朝の夕 現実的	よくめからん感じ 物語の世界 ゆるい感じ
商品コンセプトは？	高校生、大学生、30~40代？ 若めの人達	子どもむけ 小学生~高校生	大人、若い人10~20代 コービー・マリアージュ 特徴 （味・香り） 五感と刺激する	若い人 高齢な人） 現代の音楽
音楽の特徴は？	かっこいい。 でめけ。 青春スキャンジ(?) テンポが早い。 → 前へ進もう!	ヨーロッパ(=いまのを再現 している気がする。←言葉がカタ ン。下り。おろつく。白黒 夕陽をかんじ(?)	なげけ感じ 爽やか アコギ・ピアノ リズム感	不思議な世界 ゆる下りしたラ・ソ BPM高め

図2 生徒2名のワークシートへの記述

1時間目と2時間目の間に、国語科で学校を紹介するCMづくりで使用している言葉をこれまでの国語科の学びを生かしながら考えた(図3)。

【2時間目】

授業者が学校敷地内を撮影した動画(音声をカットしたもの)と国語科で考えた言葉をもとに、循環コードを使って個人で旋律を創作した。2時間目には個人で創作し、3時間目には班で協働的に旋律を創作するために、創作する箇所を分担し、楽器の音色、旋律のテンションの変化などの作品の方向性を班で話し合い、ワークシートにまとめた(図4)。なお、図4に記入された「自ら伸びよ」とは、大正13年8月制定の自伸会(生徒会)の信条である。

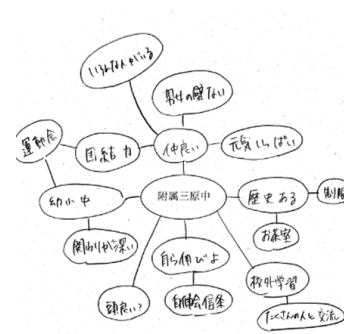


図3 生徒のワークシートへの記述

【3時間目】

2時間目に個人で創作した旋律をつなぎ合わせて、班で1つの作品とした。個人の作品をつなげただけでは、作品に違和感があることを全体で共有し、作品をどのように修正していけばよいか話し合い、付箋紙に記入した。また、修正案を記載した付箋紙は2時間目に使用したワークシートに貼ることとした(図5)。さらに、付箋紙の記述をもとに協働的に作品を修正した(図6)。

動画構想シート

日時: 月 日 時

◎動画のコンセプトは?

◎動画を作る目的は何か?

◎動画をつくる過程(場面)をここに記述

場面	1~4分	5~8分	9~12分	13~16分
イメージ(言葉)				
テンション(強弱・長短)				
その他				

図4 生徒が作成したワークシート(班名・生徒氏名は黒く塗りつぶしている)

小節	1～4小節	5～8小節	9～12小節	13～16小節
担当者	[黒塗り]			
イメージ (言葉) ※上で書いた言葉から ひびってくる。	趣	わかく	いふく 静か (29秒)	空り合がる (自他共に)
テンション (図形・矢印など)		↑↑↑↑↑ ↑↑↑↑↑		↑↑↑↑↑ ↑↑↑↑↑
その他 アイデアメモ		↑↑↑↑↑ ↑↑↑↑↑	↑↑↑↑↑	↑↑↑↑↑ (2-6) ↑↑↑↑↑

図5 生徒が作成したワークシート
(生徒氏名は黒く塗りつぶしている)



図6 協働的に作品を修正する様子

【4時間目】

完成した楽曲と映像を合わせたものを鑑賞し、SD法⁴⁾による相互評価を行った。評価の観点を図7に示す。なお、SD法による評価はGoogle formsで行い、結果を即時に被評価者に共有した(図8)。

	1	2	3	4	5	
	とても	やや	どちらでもない	やや	とても	
明るい	○	○	○	○	○	暗い
重い	○	○	○	○	○	軽い
派手な	○	○	○	○	○	素朴な
優しい(柔らかい)	○	○	○	○	○	怖い
まとまった	○	○	○	○	○	バラバラな
元気な	○	○	○	○	○	落ち着きのある
充実した	○	○	○	○	○	空虚な
賑やかな	○	○	○	○	○	寂しい
複雑な	○	○	○	○	○	単純な
理性的な	○	○	○	○	○	感情的な

図7 SD法の評価の観点

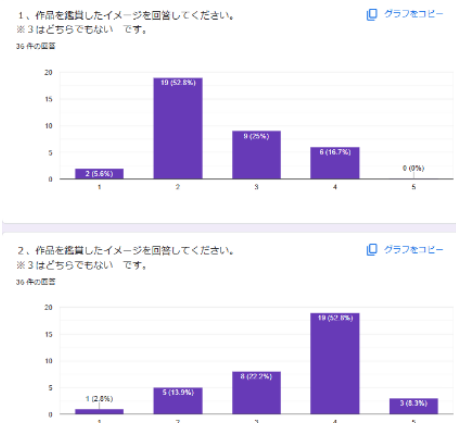


図8 生徒に共有したSD法での評価(結果)

生徒は、SD法での評価を参考にしながら、自分たちのコンセプトが伝わる作品にするためにはどのように旋律を修正するとよいか話し合い、作品を修正した。完成した作品からいくつか掲載する (<https://youtu.be/MhVRJHMGOF4?si=7dC3gFYntsQU9wvp>)。

5. 研究の成果

本研究は、生徒による(1)アンケート調査と(2)作品の評価を行い、その効果を検証した。以下に結果を示す。(1)アンケート調査では、

質問1、音楽の授業で曲をつくることは難しいことだと思いますか。

質問2、音楽の授業で学ぶことは、日常生活と関連していると思いますか。

質問3、音楽の授業で学んだことは、今後の日常生活と関連すると思いますか。

4) 商品やサービス、銘柄などの与える感情的なイメージを、対立する形容詞の対を用いて5段階または7段階の尺度で回答させる方法のこと。

の3つの項目について全ての授業時間に4件法（1：まったくそう思わない～4：とても思う）で実施した。質問1～3の結果について図9～11に示す（N=43）。

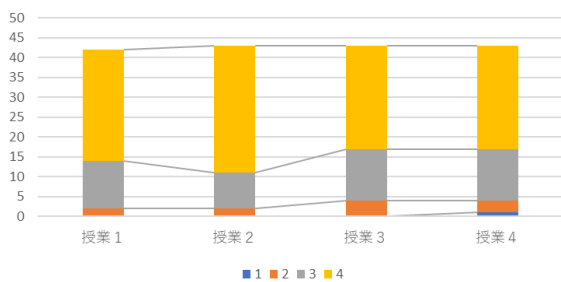


図9 質問1に対する回答

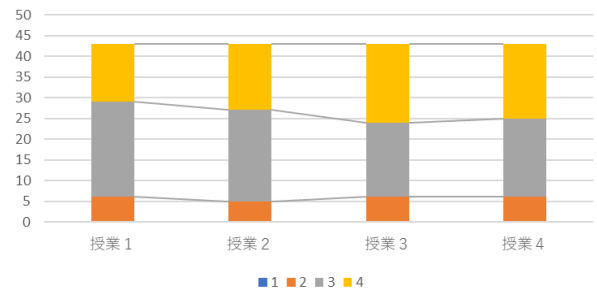


図10 質問2に対する回答

図9より、個人で旋律を創作した授業2と班で旋律を協働的に創作した授業3の間で4（とても思う）と回答した生徒が減少した。本授業実践では、音楽をつくることは難しいと感じる生徒が多かった。一方で、図10・11より、授業1～4を通して、音楽を学ぶことと日常生活との関連について、3・4の肯定的回答が全体の86%以上の数値で推移した。また、質問2・3ともに、CMにおける音楽の必要性について学んだ授業1と旋律を創作した授業2・3と授業が進むにつれて、4と回答した生徒が増加した。一方で、図11より音楽で学んだことと今後の日常生活との関連について、授業3と授業4では、11%の生徒が4の回答から3の回答へと変化したことが分かる。

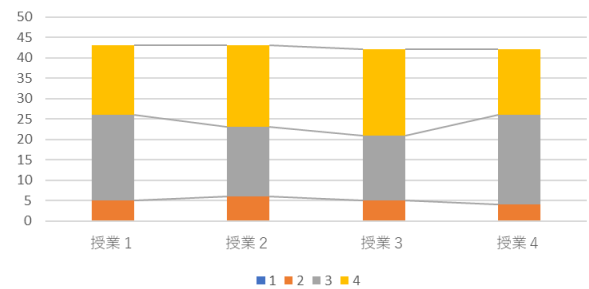


図11 質問3に対する回答

(2) 作品の評価

本授業では、flat for education（楽譜作成ソフト、以下「flat」と記載する。）を使用した。flatでは共同編集機能により、個人で創作した旋律を班の友達の旋律とつなげることができ、即時に旋律を修正することが可能である。また、教師の画面ではどの生徒がどのような操作を行ったのかという作品創作の過程を履歴の機能よりみることができる（図12）。この機能を使用して、共同編集を始めた授業3と、SD法による評価を受けて作品を修正した授業4でA班～J班の10班がどのように音符や休符を操作（追加・削除）したのか調べた。その操作回数を表2に示す。



図12 創作の過程の履歴

（生徒氏名は黒く塗りつぶしている）

表2 授業3・4における音符・休符の追加・削除数

班	授業3		授業4		班	授業3		授業4	
	追加	削除	追加	削除		追加	削除	追加	削除
A	224	80	18	5	F	269	148	273	207
B	478	247	199	72	G	362	134	108	48
C	218	95	74	11	H	44	7	349	327
D	107	75	2	0	I	396	188	135	43
E	105	38	200	134	J	110	72	8	0

表2より、B班が授業3においてもっとも音符・休符の追加・削除の数が多かったB班の授業3開始時の楽譜を図13に、授業終了時の楽譜を図14に示す。



図13 B班の授業3前の楽譜



図14 B班の授業3後の楽譜

この班では、「自ら伸びよ」という自伸会（生徒会）の信条を紹介する場面において、盛り上がりをつくるために、特に13・14小節目において音符を多く追加した。また、7・8小節目では、元のリズムは残したまま、16分音符の下降音型を追加している。ワークシートの記述では、この場面について、「ワクワクする感じを表現したい」という記述があり、その意図を旋律で表すためにリズムを複雑にしたり音符を追加したりしたことが分かった。また、B班では、旋律を変化させるのみではなく、伴奏の音型も変化させていた（図15）。



図15 伴奏の音型を変化させている記録（8小節目2段目）

一方、H班では、SD法による相互評価を行った授業4において、音符・休符の追加・削除が最も多く行われた。B班同様に、授業の前後での作品の変化を図16・17に示す。



図 16 H 班の授業 4 前の楽譜



図 17 H 班の授業 4 後の楽譜

評価者は SD 法による評価において、H 班の作品を「重い」「まとまった」「落ち着きのある」と評価した。また、自由記述では、「音楽がゆったりしていて、落ち着いている感じがします。同じリズムを繰り返しているところがいいと思った。」「すごくはっきりとした音ではないので少し暗い印象を持った。最後の 3 音ですべてがまとまった感じがした」と記載していた。これらの情報をもとに、H 班の中では音高の操作・楽器の変更が行われた。H 班生徒の授業の振り返りには「自分たちの考えだけではなく、いろいろな人のいろいろな感じ方を知れて面白かった。自分たち以外から聞いたら暗いんだなど他の人の感じ方をしれて修正しやすかった。」と記述されていたことから、自分たちは明るい感じで創作したつもりの旋律が友達には暗く伝わってしまったことを修正しようとした操作であったことが分かった。

6. 今後の課題・展望

本研究において、CM 音楽の創作を取り上げたことにより、音楽科の学習と日常生活との関連には多くの生徒が肯定的に回答（図 10・11 参照）しており、本研究における授業実践の成果であるといえる。一方で、flat を使用した共同制作や SD 法を使用した相互評価については、以下の 1～3 のような課題が残った。

課題 1 生徒の表現意図が作品にどのように表れているのかということを見取る難しさ

旋律を創作する際に、どのような意図をもって創作しているのかということはワークシートの記述（図 4・5）や振り返りなどにより見取ることができたが、その創作意図が具体的に作品のどの部分で表現されているのか、生徒の中でどのように音楽の見方・考え方を働かせた思考が行われたのかということについては研究の評価方法の再検討・修正が必要であった。

課題 2 音楽科の学習を深めながら協働的な学びを成立させるための音楽の知識・技能の個人差

旋律を創作する学習活動では、これまでの鑑賞の学びや表現の学びで得た音楽科の知識・技能、生徒の経験値として得た音楽の知識・技能を生かしながら行う学習活動である。それらの知識・技能については、個々人の定着度合いが大きく異なるものであることから、協働的な学びの中で、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽科の学習を深めるという視点では課題が残った。生徒の記述では「班の中で意見や感じ方が違うので、まとまりのある曲を作れなかった。大人しい感じの曲を作りたいけどはじめに決めたテンションに合わなかった。班員どうし意思疎通が難しかった。」など、班の中で対話を進めながら旋律を共同制作する難しさも見られた。

課題3 表現したい音楽と受け手の印象のズレを修正していく難しさ

SD法を使用して、表現者が表現したい思い（旋律・作品）と、受け手が作品を鑑賞して抱く印象のズレを認識することができた。また、肯定的に評価された班は、自分たちの作品に自信をもち、音楽を創り出す喜びを感じていた。一方で、そのズレについてどのように修正していけばよいのかという具体的な操作の内容について、生徒の中で疑問が解消されない場面もあった。生徒の記述からは「自分が思っているイメージになったと思っても他の人が聞いたら自分と違うイメージをもたれるから難しい」という記述もあった。

7. おわりに

本研究では、CM音楽づくりの事例を中心に生徒の記述や作品などを分析して、その成果と課題をまとめた。CM音楽づくりを行うにあたり、東京音楽大学教授堀井勝美氏にオンラインでCM音楽ができあがるまでに作曲家と企業との間でどのようなやりとりが行われてCM音楽ができあがるのかといったプロセスをご教授いただいたり、広告に関する企画展を鑑賞したり、文献調査したりする中で、テレビCMという時間的な制限がある媒体でどのようにコンセプトを視聴者に訴えかけるものにするのかということについて、多くの工夫がなされていることを再認識した。また、flatの共同編集の機能を活用することにより、音楽室の中での対面での実施と合わせて、当日学校を欠席した生徒であっても自宅からオンラインでつながり、作品を創作することができたことは当初想定していなかった成果であった。これも、ICTを活用する強みであると同時に、様々な学びの形を取り入れることができる可能性のある学習活動であると感じた。本研究を行うにあたり、CM音楽の制作過程をご教授いただいた堀井勝美氏、オンラインサポートで丁寧にご指導いただいた大阪公立大学大学院文学研究科島田希氏、素晴らしい音楽制作ソフトを開発してくださったflat開発チームに心から感謝申し上げたい。

8. 参考文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編. 教育芸術社, 2017, 165p.
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編. 東山書房, 2017, 165p.
- 3) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編. 学校図書, 2018, 153p.
- 4) 堀井勝美. 最強作家集団 堀井塾の作曲講座 2万曲書いても枯れない作曲テクニック!. Rittor Music, 2017, 207p.
- 5) 越川靖子. TVCMにおけるBGMの特徴に関する一考察：CMソングおよびタイアップ曲の実証研究. 湘北紀要, 2011, 第32号, pp155-167.
- 6) 井上正明・小林利宣. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 教育心理学研究, 1985, 第33号, pp253-260.
- 7) 望月愛・河瀬諭・川口明日香. テレビコマーシャル音楽が商品認知に与える影響. 日本認知心理学会発表論文集, 2010, p89.
- 8) 林 雄一郎. CM音楽のブランド・コミュニケーション効果. 大学院紀要, 第56号, 2006, p254.
- 9) 山本真郷・渡邊寧. 世界の広告クリエイティブを読み解く. 宣伝会議, 2023, 267p.
- 10) 横山隆治・大橋聡史・川越智勇. 届くCM、届かないCM 視聴率=GRPに頼るな、注目量=GAPをねらえ. 翔泳社, 2017, 325p.